GIFA ふれんどしっぷ

Gujo Hachiman International Friendship Association

Vol.12

発　行
郡上八幡国際友好協会
事　務　局
郡上郡八幡町役場企画課内
☎0575-67-1122

GIFA平成十一年度総会開催

郡上八幡国際友好協会の本年度の総会が五月二十一日に行われました。平成十年度事業報告・収支決算及び平成十一年度事業計画・予算を審議し、いずれも原案どおり可決されました。

今年は、友好協会設立十周年の節目の年でもあり、岐阜大学サマースクールをはじめとする通常の事業の他、ドイツ派遣の助成等、今後、継続して新たな事業に取り組むことを確認しました。

そのおり、美並村・明宝村でAETとして活躍されているケイド・クラークさん夫妻をゲストにお招きし国際理解を深める学習会が開催されました。学習会では、ケイドさんに日本についての印象や学校で英語を教えていることの感想を話していただき、当日参加した方からの質問に答える形で、有意義な学習会を行いました。

岐阜大学サマースクールを開催

夏の短期留学生として岐阜大学に学ぶスエーデン、韓国、アメリカの留学生十八人を郡上八幡に招き、日本文化やホームステイを体験していただき、ホストファミリーとの交流をはじめ、町民との交流による国際理解を深めることを目的とするサマースクールが本年度も七月十六日から十九日の間、開催されました。

今年は、スエーデンから十二名、韓国から五名、アメリカから一名が参加しました。

なごみ会（松田和子代表）による茶道体験をはじめ、水野政雄先生による紙細工体験。また、秋葉三尺坊（悟竹院）での座禅体験。GIFA理事でもある松浦裕之さんを講師に慣れない筆を持って書道体験を行いました。この間、ホストファミリーと、旧庁舎記念館で行われた郡上おどりにも加わり、郡上八幡の夏を楽しみました。ホストファミリーをお引き受けいただきました方々、ありがとうございました。

伝言板

GIFAでは、多数の会員の皆様とボランティアのご協力により、各種の事業を行っています。今後、さらに幅広い各層からのご参加を得て、町民全体で郡上八幡の国際化を進展させていきたいと思います。

会員やボランティアとして活動していただける方を募集しています。お気軽に事務局までお問い合わせ下さい。

郡上八幡国際友好協会　☎0575-67-1122（内線312）

「日独勤労青年交流」事業に参加して

今町　上田　晋市

僕は八月三十日から九月十一日までの間、世界青少年交流協会が主催する「日独勤労青年交流」事業に参加する機会に恵まれ、ドイツのベルリンとバーデンを訪れることができた。ドイツ研修を終えて、3ヶ月が過ぎようとしているが、いまだにあの日々の記憶は新しく、貴重な体験をさせてもらい参加して本当に良かった、という満足感で充たされている。

ドイツ滞在中は主要産業の企業と職業訓練校を訪問したり、旧所名跡を見学したり、日本との国情や文化の違いを知ることができた。

最も大きな違いは、早い時期での職業の選択と訓練を重視した教育制度だろう。

三つの進学コース

ドイツでは、日本の小学校にあたる基礎学校を卒業すると同時に、将来の職業を考えて進学先を選ばなければならない。進学先には、基幹学校と実科学校とギムナジウムの三つがあり、そのうちのどこかへ入学することになる。基幹学校と実科学校は学習内容にそれ程の大差はなく、日本の中学校と同程度のようだが、ギムナジウムは二つの学校とは異なり、大学進学を重視した学科が定められており、卒業すると同時に大学入学の資格を得ることができるそうだ。

日本では、将来どのような職種に就くかという適性よりも学力レベルによって上級学校を選ぶ傾向にあるが、ドイツの小学生は卒業をする時に、将来の仕事をあらかた決定してから進学をしているのである。

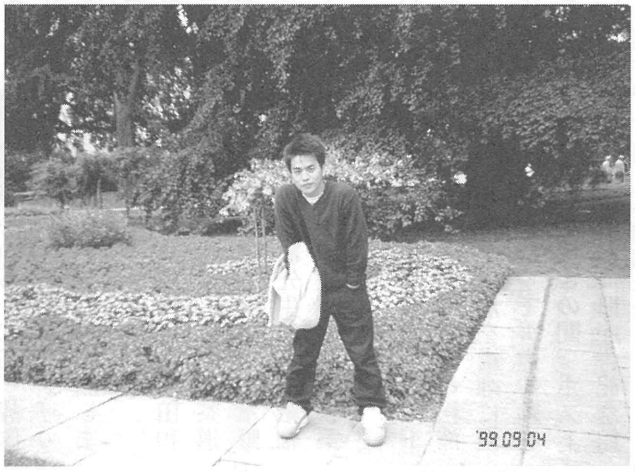
ドイツでは日本の文部省のような中央省庁が指導監督するのではなく、それぞれの州に教育行政が任されているそうだ。だから、州によって教育方針にも特色がでてくる。僕たちが訪れたベルリンは、特に職業訓練の教育に力を入れている、ということだった。

学校教育の中で職業訓練を重視している背景には、民間企業が若手労働者を採用する場合、即戦力として役立つことを要求しているという事情がうかがえる。

それは、学校での勉強が実社会では直接に役に立たないことが多いからだ。その点、ドイツの企業では、職業訓練によって技能を身につけた若者を安心して雇用することができる、という訳である。

この学校教育の中での職業訓練こそが、両国の一番の違いではないだろうか。

実は、僕も職業訓練生のような者で、家業を継ぐために期限付きで仏壇製造メーカーの研修社員にしてもらい、四年が過ぎようとしている。これは、自分の将来にとって、とてもありがたいことであり、職業訓練制度の話をドイツで聞いた時、自分のことと重なる部分があり、実感できることが多くあった。



研修の現場にて

さて、実際にドイツの企業で研修して、肌で感じたことに触れておきたい。銀行と工場の二班に別れて見学したのだが、僕は工場見学に参加した。

訪問した会社は「シュタイドレ社」という建設会社で、建設・石材・木材・住宅建築の四つの部門に分かれている会社で、従業員数は約二百五十名と中規模な会社だった。

そこで印象に残っていることがある。それは、環境保全に対しては大変な気配りをしていることである。事前研修でもそのことは聞かされていたが、実際に見ることができたのは良い勉強になった。

石材部門の採掘場を見学したが、採掘後の埋め立てについて話を聞いた時、自然環境への影響はないのか、と質問をした。

それによると、実際に採掘する場所より広い面積の土地を取得しておき、埋め立てる土の成分も周囲と同じ成分の土を使い、採掘前の状態と同じようにするそうだ。そして、自然のバランスを崩さないために必要以上の採掘はしない、ということである。

また、使用した水の汚濁には特に注意をしていて、付近に汚染による被害が絶対に起こらないよう最善の努力をし

ているようだ。

その背景には、環境の保護に対しての厳しい規制が法律で定められている、ということがあり、日本でも大いに学ぶべきところではないだろうか。

思い出のホームステイ

研修を通して、最高の思い出は三日間のホームステイである。片言の英語しか使えず、ホスト家庭には大変迷惑をかけたと思うが、いつも笑顔で接してくれたことが、何よりも嬉しかった。

僕のホームステイ先には、マルセルという十八才のギムナジウムに通う学生がいた。彼は子供の頃から工学科に進むことを考えていて、将来をしっかり見据えて勉強をしている。彼の父の仕事が機械の製造業なので、小さい時から父親の働く姿を見ていたことが影響しているのだろう。

英語に自身のない僕は、最初の挨拶こそ戸惑ったものの、当たって砕けろの精神で、とにかく何でも聞いてみようと質問を繰り返していたら、そこから話題ができて、コミュニケーションが増した。家族との話題の一つに、持参したお土産のことがある。僕は自分の仕事を理解してもらおうと思い、純金箔を張りつけた仏壇の彫刻を持っていった。そうした物はドイツにはないだろうし、珍しがられると思っていた。

しかし、意外にも金箔を使う技術がドイツにもある、とのこと。教会の装飾に金箔が用いられているようで、思わぬところで共通点を見つけてしまった。僕が持って行った彫刻は大変喜んでもらい、さっそく部屋に飾ってもらえた。

滞在中にもう一つ、忘れられない思い出がある。ホームステイが終わってから、近くの村祭りでパーティがあり、僕達も参加した。会場には、二百人ほどの人がいたが、そこで僕は歌を歌うことになってしまった。それは団長の臼井さんからの一言、「あなたが自己紹介の時に歌った歌、あれ上手だったからここでも歌ってちょうだい」で決まったのだ。僕は、坂本九さんの『上を向いて歩こう』を演奏なしで歌ったが、幸いにも、会場の人から拍手喝采を受ける出来栄えとなり、とても嬉しい思い出となった。

僕は今回の研修で、ドイツの現状や環境を守る企業のこと、学校での職業訓練など多くのことを学んだ。その上、ホームステイで知り合えた人達から、国を越えて交流することの素晴しさを教えられた。

研修に参加した僕達は、体験から学んだことをこれから多くの人に伝えていかなければと思う。そして、国際交流の担い手としての役割を果たすことができるよう協力していかなければならない。と思っている。

GIFAの窓

三年前、岐阜大学留学生として四日間ホームステイをした朴容圭君は、ホームステイが縁となって今、日本で働いている。彼は月に一度は休みを利用してわが家にやってくる。ようやく日常会話にたどたどしさがなくなってきたが、それでも機械設計の分野の専門用語には電子辞典が欠かせないらしい。

彼は現在二十八才、独身である。韓国にいる彼女とは、彼女の父親の日本嫌いで、日本にいる限り結婚は許されないという。好青年の彼に同情して、「私が彼女の父親に会ってお願いしようか」とも言ったが、「ダイジョウブですよ」と笑っている。何がダイジョウブなのかよくわからない。

この春日本での勤めを世話した親友の会社社長と朴君を通訳にして二泊三日の韓国旅行に出かけた。彼の案内する食堂は、とても安く美味しかった。味にうるさく大食漢である社長は、すっかり御満悦であった。北朝鮮との国境を接する統一展望台は、軍の敷地内にあって検閲を受けての立ち入りであった。国境線には鉄条網が張られ、戦車の砲筒は北に向けられ、今なお緊迫した最前線の様を呈していた。彼の故郷は三十八度線に近い。親戚の一部は北朝鮮にいると話す彼の表情が心無しか曇って見えた。

朴君は実に誠実で勤勉家である。十五世紀の中頃、朝鮮通信使の一員として日本を訪ねた申叔舟という高官は「隣国に対するには礼が基本であり、その次には誠意を尽さねばならない」と言った。彼の中に五百年前の先輩の言葉が生きている。国際化の進む現在、この言葉の意味は重いと教えられる。

（和田記）

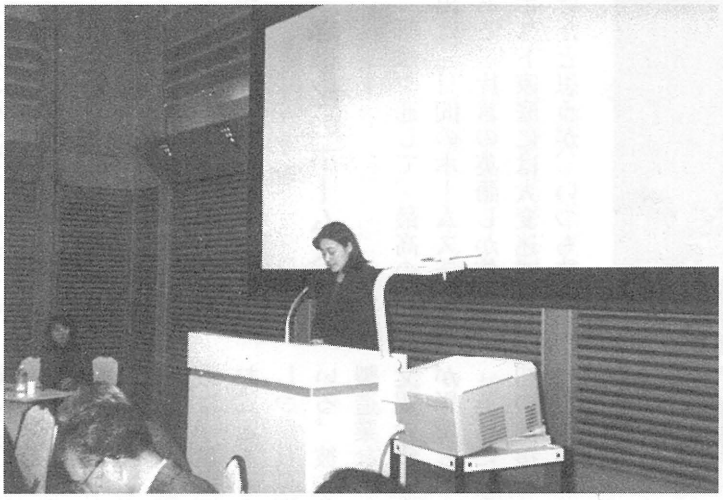
地域における国際化とは

～まちづくり交流フォーラムに参加して～

地域の「国際化」と言われ、それぞれの地域に於いて、それぞれの国際化への取り組みが進んでいますが、当協会も発足以来十年が過ぎ、その間に様々な交流が生まれてきました。

国際化は時代の中で大きな変化を迎えていますが、国際化は単に海外との交流だけでなく、「地域在住の外国人の方々との共生」が現在大きなキーワードになっています。

私たちが「外国人」を本当の地域の隣人として受けとめる事は、多様な文化背景を持つ人々が学び合い、支え合う関係を築くことです。どのような取り組みをしているのか、また課題は何なのか、それに対する対応は何であるかを考える研究集会が大垣市のスイトピアセンターに於いて十一月二十七日（土）、開催され、当協会の辻治美副会長が「市民を対象とする国際化の生涯学習活動」と題して事例発表を行い、郡上八幡らしい地域性のある、外国人との交流についての報告、町民とどう関わり合ったかなどを中心に話しました。



今回の開催地、大垣市は日系ブラジル人の二、七〇〇人を筆頭に約四、一〇〇人の在日外国人が居住しており、実に市民三十六人に一人の割合で外国人が居住している計算になるそうです。そうすると、国際交流は特別なことではなく日常的なことであり、まず挨拶をする（＝声を掛ける）ことが必要で地域の人々とのコミュニケーションの重要性を言っておられました。

郡上八幡も一昔前に比べるとずいぶんと多くの外国人が訪れるようになりました。やがて郡上八幡においても、訪れる外国人を理解し隣人として受け入れることが出来るようになれば、国際交流が特別なことではなくなる日も近いと思います。

（協会　斎藤記）

ホームステイ体験記より

１面で紹介しました岐阜大学留学生のサマースクールが、当町を中心に４日間のホームステイを行いました。ホスト家庭初体験の家庭が多く、不安と緊張の中、それでも貴重な豊かな時間を過ごされたようです。

有穂の高瀬直美さんは、スウェーデンの青年が自分の国がいかに素晴しい自然と文化に恵まれた国であるかを誇りをもって話す姿に深く感銘をしました。

大和町の大井もと子さんは、会話の中で女子学生に見つめられてテレていたパパのことを。

下桝形の可児弘行さんは、勤務先の中消防署の同僚の協力を得て、楽しい訪問が実現したことを。

大阪町の井口愛美子さんも異なる文化による習慣の違いに少しとまどったこと。

初納の和田充弘さんは、家族が協力し合い新しい絆が芽生えた喜びを。

大和町の野田恵光さんは、お酒に強い韓国の学生と盛り上がり、４日間で大切な息子ができたうれしさを報せて下さいました。

ホスト家庭の体験が思わぬ家族の新鮮な出会いになったり、生活文化の違いが、食事のマナー一つをとっても異なった意味をもつことの発見があったりして、国際交流がもたらすさまざまな学びの喜びを体験いただけたようです。